

流言というメディア

——関東大震災時朝鮮人虐殺と「15円50銭」をめぐる——

安田 敏朗

1 はじめに

1-1 流言と「ごく普通」の人びと

加藤直樹『九月、東京の路上で——1923年関東大震災ジェノサイドの残響』（こ
ろから、2014年）という本がある。表題が示唆するように、関東大震災時の朝鮮
人虐殺について、各種資料を再構成し、独自の取材をふまえて重層的に執筆さ
れたものである。参考文献やブックガイドも充実しており、読みやすい文体とあ
いまってこの問題に関する良質な基本図書になることはまちがいない（姜徳相『関
東大震災』中公新書、1975年が——新版、青丘文化社、2003年もふくめて——品
切れ状態であるのでなおさらである）。

それ以上にこの本を印象ぶかいものになっているのは、「まえがき」で、著者が「在
日特権を許さない市民の会」などが2013年に東京の新大久保でくりかえしてい
たヘイト・スピーチ¹のなかに「ぶち殺せ」という声をきき、「不逞朝鮮人」（おそら
く「不逞朝鮮人」もあったのではないか）というプラカードをみて、90年前の9月の
東京の路上でのその「残響」を感じとった——この「九月」は1923年のことだ
けではない——というくだりである。レイシストたちのえげつなく醜悪な行動と
して切りすてることのできない「残響」。戦慄が走る。レイシストたちの行動が
90年前の「ごく普通」の日本人がおこなった行為とどこかでつながっているとす
れば、ヘイト・スピーチに嫌悪感をおぼえる自分自身も、なぜ「ごく普通」の日本
人が蛮行に走ったのかを理解できないと、90年前の「ごく普通」の日本人を媒介
としてレイシストたちにつながりかねない、という戦慄である。

「在日特権を許さない市民の会」で活動をおこなっている人びとが「ごく普通」
であることを示したのは安田浩一『ネットと愛国——在特会の「闇」を追いかけて』
（講談社、2012年）であったが、「ごく普通」ということの厄介さもふくめて、この
社会全体のもつ問題としてとらえなくてはならない。

「ごく普通」の人びとが、インターネットというメディアのなかにこそ新聞やテ
レビで報じない「真実」があると信じ、まったくもって根拠のないデタラメ（つま
りは、デマである）を「真実」と思いこんで、「ぶち殺せ」と叫ぶことは、関東大震
災後の朝鮮人が井戸に毒を入れた、放火をした、などという流言（デマ）を「真実」

1

日本におけるヘイト・スピーチに関する法的措
置の不十分さは、師岡康子『ヘイト・スピーチ
とは何か』（岩波新書、2013年）を参照。

と思いこんで実際に「ぶち殺」したとことと相似している、という認識をもたねばならない。大震災後の社会不安と情報途絶の状態と、情報過多のインターネット環境とを単純に比較はできないにしても、である（しかし、情報過多は結局のところ情報途絶と同質ともいえる）。

1-2 警視庁『大正大震災火災誌』

ではなぜ、関東大震災時にこうした事態にたちいたってしまったのだろうか。1925年に警視庁が本部や所轄署などの記録を編纂した『大正大震災火災誌』では、「治安維持」の章のなかに「流言ノ発生及ヒ其原因」を設けて分析をおこなっている（以下、「鮮人」「鮮」など差別的表現が登場するが、歴史的資料であることをかんがみ、そのまま引用する）。まず「流言蜚語ノ初メテ管内ニ流布セラレシハ、九月一日午後一時頃ノナリシモノ、如ク」とあり、地震発生から一時間余りで「富士山ニ大爆発アリテ今尚大噴火中ナリ」などの流言があったという。以下時系列に流言が記録されていくのだが、朝鮮人が登場するのは早く、1日午後3時ごろの「社会主義者及ビ鮮人ノ放火多シ」というもので、翌日以降「爆弾ノ投擲」（2日午前10時ごろ）、「横浜ノ大火ハ、概ネ鮮人ノ放火ニ原因セリ」（2日午後2時5分ごろ）、「毒薬ヲ投入」（3日午後5時30分）などなど、3日午後9時ごろまでの流言が記録されている²。そして、こうした流言の大半が「鮮人暴行ノ件ニ係ル」ことについて、同書では「遠因」「近因」にわけて分析をしていく。

「遠因」に関しては、韓国併合に対する不満をもつ朝鮮人への警戒心が日本人側にあったことを指摘する。1919年の三一独立運動が「騒擾」として報じられた記憶もあたらしかった当時、「一部不逞鮮人ニ対シテ自ラ戒心ノ情ナキコト能ハズ、此時ニ際シテ、九月一日ノ震災火災起ル、コレ実ニ陰謀野心ノ徒ノ乗ジ得ベキ好機会ナレバ、予テヨリ鮮人暴動ノ杞憂ヲ抱ケル民衆ガ、直覺的ニ其ノ実現ヲ恐レタルモ亦謂ナキニ非ズ」というのである³。

「近因」に関しては、東京・横浜の朝鮮人は震災後に「窮境ニ陥リ」、とくに横浜の朝鮮人は「東京ニ出デ、活路ヲ求メントシ」て移動したものの、物資の購入も容易ではなく助けを求めようにも「言語通ゼズ」、「或ハ盗ミ、或ハ掠奪スルモノ亦ナキアラズ」とする。しかし、事情を考えれば「真ニ同情ニ値シ」、盗むといっても「実ハ輕微ノ犯罪ノミ」で、平時であればなんらの影響もなかったものだ、と留保をつける。それでも、震災後に「人心頓ニ不安ニ陥」ったところに「遠因」としての「鮮人暴動ノ杞憂」が重なり、「疑心ハ自ラ暗鬼ヲ生ジテ、事物ノ觀察正平ヲ失シ、茲ニ始メテ鮮人暴動ノ流言ヲ生ジタルモノニ似タリ」と説明する。そしてさらに朝鮮人側は日本人からの迫害をおそれて集団で逃げることもあったのだが、それが「鮮人ノ来襲」であると流言に拍車をかけ、やむをえず抵抗をする「暴動」だとされて「流言ノ一部ハ事実ヲ醸成シテ益々民衆ヲ興奮セシムルニ

2 警視庁編『大正大震災火災誌』警視庁、1925年、445-451頁（国立国会図書館デジタルライブラリーにて閲覧可）。

3 同前、453頁。

至レリ」とつづけていく⁴。

まず簡単なことから確認しておきたいのだが、警視庁自身でさえ、一貫して「流言」という用語をもちいており、「朝鮮人暴動」はなかったとしている点である。もうひとつ指摘しておきたいのは、流言が生じた原因を結局は朝鮮人側におしつけている書き方——日本人側が動揺するには応分の理由があるのだ——をしている点である。たとえば「速因」の分析のなかで韓国併合以来「朝鮮民族ト、大和民族トノ同化作用行ハレ、以テ今日ニ及ビタルモ、鮮人中往々ニシテ誤解ヲ抱キ、併合ヲ快トセザルモノアリ」、日本人側も伊藤博文の暗殺や「朝鮮内ニ於ケル頻々タル破壊運動〔三・一独立運動などを指す〕、並ニ爆弾事件〔1919年9月に朝鮮総督として赴任した斎藤実を爆殺しようとした姜宇奎による事件〕等ハ言フモ更ナリ、内地ニ在リテモ東京駅ニ於ケル閔元植ノ横死〔親日派の閔の暗殺〕、府下大久保ニ於ケル李判能ノ邦人惨殺〔1921年の連続殺人事件〕等」が記憶にあたらしく、「一部不逞鮮人ニ対シテ自ラ戒心ノ情ナキコト能ハズ」という状況にあった、などとしている⁵(〔 〕内は引用者補足。以下同)。さらに、流言を信じていったのは「民衆」であるとしており、官憲側はこれに関しては傍観者としてふるまっている点も指摘しておきたい。しかし、日本人の社会主義者たちと連帯していく朝鮮人に危機感を募らせた官憲側が意図的に流した、あるいは流言を利用して弾圧を正当化した、ということはすでにあきらかになっている⁶。

そしてなによりも重要なことは、流言の発生の原因を分析してはいても、それがなぜ虐殺——ちなみに「虐殺」ということばは登場しないし、自警団⁷が「暴行ヲ加ヘ多数ノ負傷者ヲ出スノ惨事」⁸という表現どまりである——につながっていったのかについては沈黙したままであり、警察が流言を鎮静化し、朝鮮人を「保護」したことを強調している点である。流言によって多くの朝鮮人が日本人自警団ばかりでなく軍隊、官憲などに虐殺されたことは周知の事実であり⁹、警視庁のこの書き方は自らの責任を隠蔽したものである。

もうひとつ指摘しておきたいのは、流言に安易に乗せられていくほど、一般の日本人にとって朝鮮人とは姿の見えないものであった点である。『大正大震災火災誌』が記すように、「鮮人暴動」などまったくの「杞憂」であったはずなのに。自警団から朝鮮人を守った日本人が日頃かれらとつきあいがあった場合が多かったということがこのことを逆に裏付けている¹⁰。目の前にいる朝鮮人が、流言でいわれるような行為をおこなったという証拠はどこにもないのに、「不逞鮮人」としてくくられて殺害される無法地帯が出現していた。そこには想像力のかけらもなく、外部・内部からかきたてられた根拠のない憎悪しかない。

4
同前、454–455頁。

5
同前、452–453頁。

6
流言が自然発生したものか、官憲が意図的に流したものなのか、見解がわかれるところもあるが、だれが最初に流したのかはともかく、官憲がそれを利用していったことは確かであろう(松尾尊允「関東大震災下の朝鮮人暴動流言に関する二、三の問題」『朝鮮研究』33号、1964年9、10月号など参照)。姜徳相は、官憲が意図的に流したという立場にたつ(姜徳相『関東大震災』中公新書、1975年)。

7
自警団は、1918年の米騒動や社会主義思想の浸透などに危機感をいだいた警察組織が「民衆の警察化」をはかるために、青年団や在郷軍人会などを軸に組織させた「警察の協力組織・補助機関」であり、少なくとも神奈川県下の自警団は関東大震災以前にすでに設立されていたという(樋口雄一「自警団設立と在日朝鮮人——神奈川県地方を中心に」『在日朝鮮人史研究』14号、1984年)。もちろん、震災後にも結成された。「内務省調査によれば、自警団は東京一五九三、神奈川六〇三、千葉三六六、埼玉三〇〇、群馬四六九、栃木一九などあわせて三六八九所に達し」という(姜徳相『関東大震災』中公新書、1975年、107頁。資料は「東京震災録」1926年。琴東洞編・解説『朝鮮人虐殺関連官庁資料 関東大震災朝鮮人虐殺問題関係資料Ⅱ』緑陰書房、1991年)。

8
警視庁編『大正大震災火災誌』警視庁、1925年、458頁。

9
くわしくは、山田昭次『関東大震災時の朝鮮人虐殺とその後——虐殺の国家責任と民衆責任』(創史社、2011年)など参照。

10
山田昭次「関東大震災時の朝鮮人虐殺をめぐる日本人社会主義者と日本人民衆の思想と行動」、歴史学研究会編『韓国併合』100年と日本の歴史学——「植民地責任」論の視座から(青木書店、2011年)など参照。

1-3 ことばで区別すること

つきあいがあった場合はともかく、そうでない場合は見分けることはなかなか難しい。『大正大震災火災誌』においても、「東京市内ハ避難者其他ノ来往雑閥ヲ極メ、形勢既ニ常ナラザルニ加ヘ、内地人ト鮮人トノ区別困難ナリシガ為ニ、言語不明瞭ナル者アラバ、認メテ以テ鮮人トナシ、集団ヲ成セル避難民ヲ見テハ不逞者ノ団体ナリト速断シ、鮮人労働者ガ其ノ雇主ニ引率セラレテ作業場ニ赴ケルヲ望ミテハ、鮮人団体ノ来襲ナリト誤認セルガ如シ」¹¹と記されている。

ことばが通じなかったら朝鮮人、集団でいたら朝鮮人、引率されて朝鮮人が歩いていたら朝鮮人の襲撃などと「誤認」していたということである。いくら混乱していたとはいえ、たまったものではない。

関東大震災時の朝鮮人虐殺に関しては数多くの先行研究があるが、本稿ではこの、ことばが通じなかったら朝鮮人だ、というところに焦点をあててみたい。

現実問題として、この当時日本内地にきていた朝鮮人の大半は日本語がそう自由に話せたわけではない。したがって、日本語を話しかけて通じなければ朝鮮人だ、というのは比較的確度は高いのだが、日本語が流暢な朝鮮人もいるし、自警団のつかう東京ことばに慣れていない日本人の地方出身者もいる。実際に、9月6日に、香川県からの行商人15人が、千葉県において、朝鮮人だとされてうち9人(妊婦もいたので、胎児をふくめれば10人)が殺害された「福田・田中村事件」がある。一行が香取神社付近で休息していたところ、身なりが怪しいとのことで自警団に訊問されるが、讃岐のことばが耳慣れなかったのだろう、さらには郷里への土産にと買っていたクジャクの羽根の扇子が珍しく、「やはり朝鮮人だ」とされたのだという¹²。

だからこそ識別法が必要であった。確実に識別ができ、しかも効率のよいものが。

歴史学者の姜徳相は、「朝鮮人識別法」という用語で「代表的なものが「十五円五十銭」と発音させる方法で、これ以外にも、「ザジズゼゾ」「ガギグゲゴ」「座布団」あるいは、「いろはカルタ」「歴代天皇の名前」「教育勅語」の暗誦、「君が代」を歌わせるといったものがあった。ただ絶対確実な方法ではもちろんなく、誤って日本人や中国人も殺害されたという」と説明している¹³。

ここでは、とくに「15円50銭」¹⁴ということばに注目する。上記の「福田・田中村事件」においても、1983年に生存者(事件当時14歳)への聞き取りをおこなった石井雍大によれば、自警団が「君が代を歌え」「教育勅語」「『一五円五〇銭』をいってみろ」といっていたという¹⁵。ここにあらわれる「君が代」「教育勅語」は確実さと効率の面で「15円50銭」より劣る。なぜなら、就学率の問題や、たとえ学校教育を受けていても正確に記憶しているか確実ではないし、歌わせたり唱えさせたりするのに時間がかかり、火急の用には不向きだからである¹⁶。そして

11 警視庁編『大正大震災火災誌』警視庁、1925年、446頁。

12 「名のりあげた遺族——「殺されたのは朝鮮人ばかりではありません」」、千葉県における関東大震災と朝鮮人犠牲者追悼・調査実行委員会編『いわれなく殺された人びと』青木書店、1983年、155、157頁。

13 在日本大韓国民団中央民族教育委員会企画『歴史教科書 在日コリアンの歴史』明石書店、2006年、34頁脚注。

14 白米10キロが1922年時点で3円4銭だったというから、15円50銭はそう安い値段ではない(週刊朝日編『値段の明治大正昭和風俗史』朝日新聞社、1981年、115頁)。

15 石井雍大「千葉県福田・田中村事件研究の歩み——混乱の中で殺された日本人」、関東大震災80周年記念行事実行委員会編『世界史としての関東大震災——アジア・国家・民族』日本経済評論社、2004年、77頁。

16 演出家で俳優の千田是也(1904～1994)の芸名の由来が関東大震災時、9月2日の夜に千駄ヶ谷で朝鮮人にまちがえられて殺されそうになったところにあるのは有名な話であるが、早稲田の学生証をみせても自警団には信じてもらえず、「『アイウエオ』を云ってみろだの、『教育勅語』を暗誦しろだの」と云う。まあ、この二つはどうやら及第したが歴代の天皇の名前を云えと云うにはよわった。どうせこの連中だつてよく知っているまいと度胸を据えて、できるだけゆつくりととなえ、もう思い出せなくなったときに自警団のなかの知りあいに気づいてもらい助かったのだという(千田是也「わが家の人形芝居——ある役者の自伝のひとつ」『『テアトロ』28巻5号、1961年5月、21頁)。こうした識別法があまり効率的不是なことがわかる。また壺井繁治も自身の体験を述べるなかで「勅語を読ませて、満足に読めなかつたがために××人だと云つて殺された日本の労働者もあつた」と指摘している(壺井繁治「十五円五十銭」『戦旗』1巻5号、1928年9月、82頁)。

そもそも前二者は流言をきいてから思いつくような識別法である。一方「15円50銭」は、のちにみるように、流言以前に朝鮮人との接触のなかからおのずと生じていた識別法が洗練されたもののように思われる。

「15円50銭」は、体験者が数年後に流通の限られた雑誌に記録したほかは、数十年後の証言に残されているばかりである。しかしながら、敗戦後に朝鮮人虐殺問題について精力的に資料を収集し論考を発表してきた姜徳相が、この識別法について記述している。たとえば、2010年刊行の『在日コリアン辞典』（明石書店）には姜の筆によって立項されている。この項目は、のちにふれる壺井繁治の詩「十五円五十銭」（1948年）の紹介からはじまる。ただ、このことばそのものよりも、関東大震災時の朝鮮人虐殺（姜は「民族ジェノサイドを伴う植民地戦争の一角を占める事件」¹⁷とする）の背景の説明が中心となっており、次節以降の証言にみるこのことばのひろがりのもつ意味などへの言及はない。それで十分といえは十分なのであるが、もうすこし立ちどまって考えたい。

この「15円50銭」という識別法がどのようにして確立したのかは明らかにできないものの、語頭に有声音（濁音）が立たないという朝鮮語の特徴をとらえたものであることは確かである。これは朝鮮人をめぐる流言¹⁸とセットになって広まった（後述するが組織的に広めたと疑う人物もいた）と考えられるのだが、「15円50銭」のさまざまな伝えられ方をみていき、さらに冒頭のヘイト・スピーチをめぐる状況へたちかえることで、「触発するメディア」という特集テーマにいくばくかでも沿った議論ができればと思う。

17

国際高麗学会日本支部『在日コリアン辞典』編集委員会企画『在日コリアン辞典』明石書店、2010年、226頁。

18

新聞が報じた流言について全国各地の新聞記事を通じて分析したものとして、山田昭次『関東大震災時の朝鮮人迫害——全国各地での流言と朝鮮人虐殺』（創史社、2014年）がある。

2 証言のなかの「15円50銭」

2-1 手記などのなかから

まずは、朝鮮人虐殺に関する新聞記事や証言、手記などが記載されている、今回の執筆に際し主に参照した資料集をあげる¹⁹。

- ①姜徳相・琴秉洞編『現代史資料(6) 関東大震災と朝鮮人』みすず書房、1963年
- ②李珍珪編『関東大震災における朝鮮人虐殺の真相と実態』朝鮮大学校、1963年
- ③関東大震災時に虐殺された朝鮮人の遺骨を発掘し追悼する会発行『関東大震災時 朝鮮人虐殺事件 東京フィールドワーク資料』2011年11月
- ④関東大震災時に虐殺された朝鮮人の遺骨を発掘し追悼する会発行『関東大震災時 朝鮮人虐殺事件 東京フィールドワーク資料(下町以外編)』2012年1月
- ⑤関東大震災時に虐殺された朝鮮人の遺骨を発掘し追悼する会発行『関東大震災時 朝鮮人関連「流言蜚語」・東京証言集』2012年6月

19

ほかに、琴秉洞編・解説『関東大震災朝鮮人虐殺問題関係資料』I～IV（緑陰書房、1991年、1996年）や『関東大震災政府陸海軍関係史料』1～3巻（日本経済評論社、1997年）などがある。

引用に際しては資料①～⑤および原資料名を記し、原資料にあてられた場合には書誌情報を追加した。①、②は日本内外を問わず、新聞雑誌手記などに記された朝鮮人虐殺に関する記述や公文書などを丹念に収集したもので、③～⑤は、数多く出された関東大震災に関する手記や証言などのなかから、朝鮮人虐殺に関する部分を抜粋して発生した地域ごとにまとめて配列した労作である(ただし、識別法に関して②、③に記載はない)。

まず、当時残された資料のなかで、朝鮮人をそのことばによって識別しているという記述があらわれるのが、札幌で発行されていた『北海タイムス』の9月8日の記事である。東京で勉学中に被災して北海道に戻ってきたある学生の証言として、埼玉県の川口まで歩いてそこから北に向かう列車に乗りとうとしたところ、「此時は最う不逞鮮人に対する警戒が嚴重で何か物を喋舌らし其発音に依つて一々鮮人か否かを判断するので却々時間を費し漸く邦人たる事が証されて乗車票を貰ひました」というものである(資料①、177頁)。東北本線・高崎線・信越本線は、埼玉県の川口町駅以北は無事だったので9月2日から大宮駅(川口町駅より北)を始発終着として列車を運行させている。9月5日からは、東北本線への列車は、より南の田端駅を始発、高崎線・信越本線への列車は、さらに南の日暮里駅始発としているので²⁰、この学生は4日までに川口町駅から列車に乗り(3日に鉄道大臣が被災者の無賃輸送を決定している²¹)、大宮で乗り換えて北に向かったと考えられる。ともあれ、なにかを話させて識別していた、という記録として早いもののひとつになる。ただ、具体的になにを話させていたのかは明記されていない。また注意したいのは、朝鮮人と思われる人ではなく、全員になにかを話させていた点であり、時間がかかっていたということである。より確実に効率のよい識別法が必要とされる背景でもある。

先にもふれたように、学校関係の知識、たとえば五十音を唱えさせる識別法は比較的思いつきやすかったもののようである。

ある証言によれば、9月1日午後6時ごろ、亀戸の天神様の境内に入ろうとすると、「「アイウエオ」と言ってみると言われ、私は何が何だか判らないと言われるままに、「アイウエオ、カキクケコ」とアカサタナと答えると、「ヨシ通れ」といわれた(資料③、16頁。『関東大震災の追憶』1973年)とあり、また、のちに著名な万葉学者となる犬養孝(1907～1998)の体験談として、9月2日の晩も台東区の護国院境内(上野公園内)で寝泊まりすることとなり、「朝鮮人かどうか識別するため、アウウエオ……と五十音を言わせるのが一番良いということになり、上野の山に逃げて来る人々を自警団が訊問していった。このため身動きできないほどの大混雑となった」(資料③、55頁²²)というものがある。識別法が泥縄式に考えられていたことを示すものではあるが、ここでも示されているように時間がかかるし、学校教育を受けているか否かの識別にはなるものの、語頭に有声音が立たないという朝鮮語の特徴をとりだすことはできない。ガ行やバ行をいわせた

20
内田宗治『関東大震災と鉄道』新潮社、2012年、191頁。

21
同前、195頁。

22
山内英正「関東大震災の思い出——犬養孝先生に聞く」、犬養孝博士米寿記念論集刊行委員会編『万葉の風土・文学——犬養孝博士米寿記念論集』塙書房、1995年、698頁。

という証言もみられるが、識別法として決定的ではない²³。

しかし、「15円50銭」はまた趣がことになってくる。各種証言をみていくと、「15円50銭」という識別法は9月2日の昼ごろにきいたことがある、というものが時間としてはもっとも早い(資料④、31頁)。落合茂という当時15歳だった人物の手記だが、それによれば9月2日の

朝になって、富士が噴火して宝永山がなくなったとか、江の島が陥没したという噂が流れ、不安を倍加した。

「鮮人が井戸へ毒を投げこんでいる。〆昨日からの火事は鮮人の放火だ。といった風説を耳にしたのは二日の昼ごろだった。町にはこん棒を持った在郷軍人服の自警団が巡回していた。通行人でも朝鮮人くさいとみると〆十五円五十銭。といわせ、ガ行、バ行の発音がおかしければ、朝鮮人と見なされてリンチされるという。」²⁴

これは1975年に刊行された手記の一部である。落合は築土八幡にあるおじの家に寄宿していたというので、新宿区での見聞になるのだが、この書き方だと「15円50銭」などの識別法は伝聞のようにもとれる。

別の資料によると、おなじく2日の夜12時すぎ、日比谷公園に避難していた野木松治という人物は、人混みから逃れようと御成門の方へ歩きだす。

ところが公園から2百メートル程も歩いた四つ角の所へ来たときです。物陰からいきなり3人の鉢巻²⁵をして、竹槍を持った男達が現れて、「山。」といって私の両脇へその竹槍を突き付けました。私は驚いて、何と言ってよいのか、ただふるえていると、1人の男が私に向かって、「お前は日本人か、朝鮮人か。」と強い句調で言いました。「日本人です。」私は恐しさに声がふるえてうまくしゃべれませんでした。「本当にお前は日本人か!」「十円五十銭と言ってみろ!」男達は私を取り囲み詰問してきました。脇腹にはビタリの竹槍です。「十円五十銭。日本人です。私は日本人です。」(資料④、19-20頁。『体験』1975年)

「15円50銭」と「10円50銭」という微妙なちがいはあるが、震災翌日にはすでにこうした識別法がある程度広まっていたと考えることもできる。このふたつの資料はともに1975年のものであるが、震災から半世紀が経過し、実体験者の記録のひとつのピークを迎えていたことがうかがえる。

日時の特定はできないが、墨田区立木下川小学校の作文集に以下の記載がある。

「……」あやしい人を見つけたら「拾五円五拾銭」と言わせるのです。朝鮮人は「チュウコエンコチュッセン」としゃべるからわかるのです。最初につかまった人は小説家で文章を書くのはうまいのですが、しゃべり方は方言(なまり)

23

隅田川河畔で「東北なまり」の人間に「ガギグゲゴをいってみろ」とつめよって川に投げ込んだ場面の目撃証言などがある(日朝協会豊島支部編『民族の棘——関東大震災と朝鮮人虐殺の記録』日朝協会豊島支部、1973年、38-40頁)。

24

清水幾太郎監修・関東大震災を記録する会編『手記・関東大震災』新評論、1975年、195頁。

25

資料④、34頁には、「朝鮮人識別法は「鉢巻をしてみる」といって、できれば日本人、できなければ朝鮮人」(方珠源(当時、早稲田大学工科・夜間))という証言が記載されている(初出、関東大震災時に虐殺された朝鮮人の遺骨を発掘し追悼する会編『韓国での聞き書き』1983年)。「鉢巻」ひとつにも意味をもたせていたことになる。

があって、それにつかまったおどろきでよくしゃべれません。私たちは急いでつかまえられた場所(土手)に行って「この人はちがいます。ちがいます。」
といて助けてもらいました。(資料⑤、39頁。墨田区木下川小学校4年1組『関東大震災しんさい作文集』添付資料No.3、1983年9月30日)

なぜ「15円50銭」といわせるのか、その理由までしっかりと書いてある。そしてまたこれが「完璧な」識別法でもないことも。発音できないことにはさまざまな理由があるのだが、そうしたことは考慮の外にあった。

この木下川小学校をふくむ地域で1980年代以降証言があつめられていったのだが、それによれば、9月2日あたりから朝鮮人虐殺がはじまったという²⁶。そのときの光景であるとするれば、流言蜚語に対応する形でこの識別法が考案されたとは考えにくい。墨田区や荒川をはさんだ対岸の葛飾区などには家内工場などの中小の町工場が多く、比較的多くの朝鮮人を雇用していたという²⁷。

2-2 「15円50銭」の起源

当時の日本の朝鮮人人口について各種統計はあるものの、確定することは難しい。1923年の道府県別朝鮮人人口推計によれば、東京府は8,567人、神奈川県は3,645人となっている。大阪府が33,626人で最も多く、福岡県が15,645人、山口県が7,248人などで、この年の総計は136,557人と推計されている²⁸。

朝鮮人が集住している場所であれば、日本人との接触の機会も高くなる。そのなかで朝鮮人の発音のある特徴が記憶されていったことは十分に考えられる。ひとつ鍵になる証言がある。

五日ごろになると余震も遠のき朝鮮人騒ぎもそれほどでないと伝わった。また、横浜方面からの避難者から保土ヶ谷あたりの自警団の検問方法を聞いたのも父と伯父を勇気づけたようであった。それによると、自警団の検問所の前に来ると「止まれっ！」と一喝され、まず行き先を聞かれた。そして一から一〇まで数を読まされるのである。なぜ数を読ませるのかと聞くと、朝鮮人は五と一〇の濁音が出ないのでわかるということであった。(資料④、93頁。町田市原町田、前田敏一の証言²⁹)

これは、当時の東京府町田町方面に避難してきた人から識別法をきいて安心したという伝聞であるが、数字の発音で識別するという、実践的で現実的なものが震災以前にすでに存在していたことをうかがわせる。保土ヶ谷町(1927年に横浜市に編入され保土ヶ谷区)とは、横浜の海岸沿いで被災した「多くの避難者は保土ヶ谷、神奈川方面に至るもの多く、為に全町方面亦鮮人の居住多きと流言の熾んに行はれたるに依り、一層の混乱と恐怖に基く種々なる事象を現出す

26

証言および証言をあつめるにいたる経緯などは、関東大震災時に虐殺された朝鮮人の遺骨を発掘し追悼する会編『風よ 鳳仙花の歌をはこべ——関東大震災・朝鮮人虐殺から70年』(教育史料出版会、1992年)を参照。

27

同前、68頁。

28

田村紀之「植民地期「内地」在住朝鮮人人口」『経済と経済学』52号、1983年2月、34頁。この論文は1920年、30年、40年の国勢調査による内地朝鮮人人口をもとに、1910年から1945年までの各道府県別朝鮮人人口を推計したものである。

29

町田市史編纂委員会編『町田市史 下巻』町田市、1976年、831頁。資料④では証言者が誤記されているので、引用に際して訂正した。

るに至れり」と神奈川県警察部のまとめた資料に記載された場所であった³⁰。同資料によれば、保土ヶ谷は「鉄道工事及富士紡績工其他土工を合し、鮮人労働者二百名の居住を見たりし」という場でもある³¹。先の警視庁『大正大震災誌』では朝鮮人暴動などの流言は「九月二日午後二時前後ニ於テ、横浜方面ヨリ上京セル避難者ニ依リテ唱導セラレ」たとされている³²。低賃金での劣悪な労働環境にさらされつつも日本で生活していくために数字を覚えるのは自然の流れであろう。そこに朝鮮語発音の特徴があらわれ、ある程度朝鮮人と接触する人たちに、「1から10までの数字を読ませる」ことが語頭の濁らない5と10を引きだすための手法として存在していたのではないだろうか³³。この「接触」は、日本人との間にある賃金差別、習慣、言語のちがいなどから、労働現場において「ケンカ」という形であられることも多かった。神奈川県下における新聞記事となった日本人労働者との「ケンカ」の事例が樋口雄一の論文に紹介されている³⁴。樋口の指摘によれば、「日清、日露戦争を朝鮮の地で戦った自警団の有力メンバー」³⁵として在郷軍人がいたというのが、戦地での体験が識別法に反映された可能性も完全には否定できない³⁶。

こうした点から、保土ヶ谷の自警団が1から10までいわせることを識別法にもちいていても不思議ではない。町田の住民がその識別法を知って大いに安心したというのも、周囲に朝鮮人がいなかったことを示すものでもあろうし、流言と識別法が避難民の移動とともに拡大していったとも推測できる。

しかし、そのたびに1から10までいわせるのも効率的ではない。そこで、この5と10を組みあわせたのが、いうまでもなく「15円50銭」であり、「10円50銭」、「15円55銭」³⁷や「1円50銭」³⁸というバリエーションを生むことになる。値段の表現になっている点も、教育勅語や五十音などといった学校教育と結びつきの強い識別法より日常生活に即したものといえる。

3 壺井繁治「十五円五十銭」をめぐる

3-1 壺井繁治の関東大震災

ここまで紹介してきたものは、『北海タイムス』以外は関東大震災からかなり時間が経過したあとの証言である。

証言の正確さについて疑いだせばきりががないのだが、ここでは比較的時間がたたないうちに記録された「15円50銭」について記しておきたい。とはいえ、5年後のことである。

記録したのは、香川県小豆島出身のプロレタリア詩人・壺井繁治(1897～1975。妻は同郷の児童文学作家・壺井栄、1899～1967)。

30

神奈川県警察部編『大正大震災誌』神奈川県警察部、1926年、394頁(国立国会図書館デジタルライブラリーにて閲覧可)。また、今井清一『横浜の関東大震災』(有隣堂、2007年)には、『関東大震災の治安回顧』(吉河光貞、1949年)の「京浜地方の流言伝播図」を掲載しているが、それをみると、いくつかある経路のうちに、保土ヶ谷を発信源として神奈川、町田を経由し、世田谷や渋谷に向かうものが記されている(179頁)。

31

このころの在日朝鮮人の「都市やその近郊で代表的な職業は鉛売り、その鉛売りから転じた「屑屋」(廃品回収業)、零細な町工場の労働者、そして清掃業(肥汲み)でした」(在日本大韓国民団中央民族教育委員会企画『歴史教科書 在日コリアンの歴史』明石書店、2006年、40頁)。

32

警視庁編『大正大震災誌』警視庁、1925年、454頁。ちなみに、神奈川県警察部編の『大正大震災誌』では、流言は東京方面からの避難者がもちこんだものであるという説も併記している(391頁)。

33

厳密に言えば、1から10までを区切らず速く言えば、前の母音の影響で5も10も有声音で(濁って)発音されるはずである。

34

樋口雄一「自警団設立と在日朝鮮人——神奈川県地方を中心に」『在日朝鮮人史研究』14号、1984年、36～37頁。

35

同前、45頁。

36

この点に関して、宋実成氏からご教示いただいた。記して感謝したい。また、朝鮮語の学習書には「朝鮮ニハ濁音ナシ否無キニ非ラス唯初メニ則チ言ヒ出シニ濁音ナキナリ」というような記述はある(島井浩『実用韓語学』誠之堂書店、1902年(『歴代韓国文法体系 第2部 第11冊』塔出版社、1985年所収))。もちろんこうしたところから知識をえた者は限られるだろう。

37

姜徳相『関東大震災』中公新書、1975年、112、123頁。

38

専修大学学生会『震災記念号』1924年(姜徳相『関東大震災』中公新書、1975年、163頁より再引用)。

ほかに琴乗洞編・解説『関東大震災朝鮮人虐殺問題関係資料』Ⅲ(緑陰書房、1996年)に、壺井のふたつの「十五円五十銭」が掲載されている。

壺井繁治「十五円五十銭」『戦旗』1巻5号、1928年9月、80頁。1947年の「震災の思ひ出」では、4日ではなく2日のこととされている。「一介の文学青年」であった壺井は上野公園近く(旧下谷区谷中真島町)に下宿しており、牛込弁天町の友人の下宿から江戸川に向けて歩いてた。誰何されたのが「音羽町に通ずる橋の少し手前の屯所」であった。そこで兵隊に「貴様! 朝鮮人だらう。」と詰め寄られる(壺井繁治「震災の思ひ出」『民主朝鮮』2巻7号、1947年1月、62-63頁)。さらに、自伝『激流の魚』(立風書房、1975年、初版は光和堂、1966年)では3日のことになっている(立風書房版、170頁)。

なお、壺井が9月5日に東京を出発したことは、「十五円五十銭」、「震災の思ひ出」、「激流の魚」ともに一致している。先に示したように、9月5日からは高崎線・信越本線への列車は日暮里駅始発、東北本線への列車は田端駅が始発となるが、震災翌日からはともに大宮駅を始発とし、大宮～日暮里間でピストン輸送をしていた(内田宗治『関東大震災と鉄道』新潮社、2012年、191頁)。4日は東北本線、高崎線、信越本線が「日暮里より途中赤羽、川口間乗次の上直通」という状況であった(『東京朝日新聞号外』1923年9月4日、4面)。高崎線に乗りなばならない壺井が日暮里駅発の列車に途中の田端駅から乗車したとは考えにくい(回想ではすべて田端駅となっており、おりかえし乗車のために川口方面から満員となったまま出発するので田端駅からほとんど乗車することができなかった、と記している——壺井繁治「十五円五十銭」『戦旗』1巻5号、1928年9月、78頁)。そこで、『関東大震災と鉄道』が依拠した資料をみると、9月5日は「下り方面行の旅客が多かつた為非常に混雑を来したので、旅客の便を図り日暮里駅を高崎方面行、田端駅を東北方面の列車発着駅とし、日暮里大宮間七往復、田端大宮間九往復の旅客列車を運転することにした」とあるので、壺井は田端から乗車し大宮でのりかえたということなのだろうか(鉄道省『国有鉄道震災誌』1927年、251頁(大正期鉄道史資料第2期第一巻として日本経済評論社から1990年に復刻))。ただし、乗り換えについては記されていないので検討が必要ではある。

壺井繁治「十五円五十銭」『戦旗』1巻5号、1928年9月、81-82頁。

壺井はこのことばに関して、以下の文章で言及をしている。

「十五円五十銭」『戦旗』1巻5号、1928年9月

「震災の思ひ出」『民主朝鮮』2巻7号、1947年1月

「十五円五十銭」『新日本文学』2巻4号、1948年4月

『激流の魚——壺井繁治自伝』光和堂、1966年(立風書房、1975年)

前節で参照した資料②に、1948年のもの(詩である)が掲載されているが³⁹、まずはもっとも早い『戦旗』のものをみていくことにする。

東京で被災した壺井は、9月4日に郷里で隣同士だった友人とふたりで牛込弁天町から音羽に向かって歩いていたのだが、2日に東京およびその周辺に布かれた戒厳令にもとづき警戒にあたっていた兵士に「待て! 貴様、××人だらう?」とよびとめられる。ロシアの民族衣装のルバシカを着用していたため目立ったからかわからないが、友人の説明により事なきをえた。ここでことばの問題は登場しない。引用の伏字「××」はいうまでもなく、「朝鮮」である⁴⁰。

壺井は郷里の小豆島に向かうために5日に田端駅から汽車に乗る⁴¹。東京発の東海道線は当然不通なので、ひどい混雑——「あんなに混雑した汽車に乗つたのは生れて始めてだった」と「十五円五十銭」ははじまる——のなか高崎線、信越本線に乗り、長野県篠ノ井駅で降ろされて一泊する。その間、信越本線の磯部駅(群馬県)で列車の底に隠れていた朝鮮人3人が土地の青年団にみつきり捕えられるという事件も目撃している(その後の生死は不明だが、絶望的である)。朝鮮人同様、社会主義者やアナキストも虐殺されていたことは大杉栄、伊藤野枝たちの殺害や亀戸事件などであきらかであるが、社会主義者は長髪だというイメージもあってか、長髪でありなおかつ社会主義的な思想にひかれていた壺井は気がではなかった。翌6日、篠ノ井線で塩尻経由、中央線で名古屋に向かうのだが、篠ノ井線のとある駅に着くと、「例の如く剣突き鉄砲の兵士が、窓から首を突込で車内を調べ始めた」。そして、

「おい、貴様、ジウゴエンゴヂツセンと云つて見ろ!」

兵士は突然私の側にある色の黒い印袴纏の労働者を指して鋭く怒鳴つた。

彼はこの突然の奇異な訊問の意味が解らないと見えて、ドキマギしてゐた。

が、暫くして、はつきりと、

「ジウゴエンゴヂツセン」と答へた。

「よし!」と兵士は案外にあつきりと切り上げて立ち去つた。

ジウゴエンゴヂツセン。十五円五十銭。

兵士の立ち去つた後で、私は口の中で二三度繰返して見たがその訊問の真意がどうしても了解出来なかつた。訊問された労働者もその訊問の意味がまだ了解出来ないと見え、頻りに一人で首をひねつてゐた。⁴²

3-2 識別法の効果

ここで注意したいことが二点ある。まずは、「15円50銭」という識別法が長野県に伝わっていた点である。この識別法がどのようにしてこの兵士に伝わったのか、明確にはわからない。長野県であるので、兵士の所属は松本市駐屯の当時の第13師団歩兵第50連隊であったかと思われるのだが、壺井より先に移動した避難民たち⁴³からこの識別法が広まっており、それを利用した可能性はある⁴⁴。

注意したいもう一点は、訊問される側が識別法の意味がわからなかった点である。前節での議論をふまえれば、壺井が東京で朝鮮人と日常的に接する機会がなかったことを意味している。しかしのちに壺井は訊問のことばの意味に気がつく。

××人であるかないかを調べるためには、必ず濁音のある言葉を言はせたさうだ。例えば座布団、ザブトン、サフトンと発音して、その場で自警団のために斬殺された××人もある。私が汽車の中で目撃した出来事。「ジユウゴエンゴヂツセン」と云ふ濁音の多い言葉を、若し満足に発音できなかつたとしたら、おそらくあの労働者もどんな目に遭われたかも知れない。⁴⁵

なお、「座布団」は、「ジャブトン」と発音されるかどうかをみるための識別法であろう⁴⁶。

『戦旗』は壺井が主要メンバーでもあった全日本無産者連盟(ナッパ)の機関誌である。壺井のこの文章には1928年8月の日付があり、同年におこなわれた共産党弾圧事件(3.15事件)や共産党系の三団体(労働農民党・日本労働組合評議会・全日本無産青年同盟)の解散(4.10事件)などによって立ち現われてくる「新帝国主義」に対して、「如何に闘争すべきであるか」を考えねばならない、としめくくる。そういう性格の文章であるから、批判の対象は明確である。壺井はいう。「あの大地震のドサクサまぎれに、資本家地主階級の手先である当時の反動政府は、彼等が利用し得る一切の機関を動員して無数の××人や労働者や戦闘的プロレタリアートの組織的な××〔殺害、虐殺?〕を行つた。〔……〕××人と日本人とを区別するために、奇異な訊問を行つたのだ」と。そして「一人の兵士の口を借りて云はせたこの奇異なる言葉の裏に、我々は支配階級の死物狂ひの姿を見逃す訳には行かない」⁴⁷ともいう。

壺井は、支配階級の組織的な犯罪という主張をしたかったのだろう。この文章では明確には記していないが、1947年の「震災の思ひ出」では、「朝鮮人か日本人であるかをテストするため、出来るだけ濁音の多い言葉をいはせてみる」ことが、当時の戒厳司令部や警視庁から全国的に指令されたであらうことはまちがひない⁴⁸。さらに1966年の自伝では「その人間が日本人か朝鮮人かを見分けるために、濁音の最も多いこの言葉、すなわち「十五円五十銭」の

43

北原素子『関東大震災の社会史』(朝日新聞社、2011年)が紹介する更級郡役所による篠ノ井駅での救護者数統計(『信越線篠ノ井駅救護者数』)によれば、統計をとりはじめた9月4日と5日の合計が約6,000人となっている。6日以降10日にかけて増加し、17日までの総計は57,400人になるという(266頁)。

44

1923年の長野県の推計朝鮮人人口は2,134人となっており、13位となっている(田村紀之「植民地期「内地」在住朝鮮人人口」『経済と経済学』52号、1983年2月、34頁)。また、長野県が1926年に作成した『朝鮮人概況書』には以下のように記されている。「本県ニ於テ工事場トシテ鮮人ヲ大規模ニ雇ハレタルハ大正十年ヨリ十二年ニ亘リ西筑摩郡木曽川流域ニ大同電力株式会社ガ施行シタル発電工事ニシテ其ノ際稼働ノ鮮人盛時五千人ヲ算セリ」とあり、飯場をつくり集住していたという(『長野県における在日朝鮮人』『在日朝鮮人史研究』12号、1984年、104-105頁)。こうしたなか、前節でみたように朝鮮人との接触により識別法が発生していた可能性もあるが、確定的なことはいえない。

45

壺井繁治「十五円五十銭」『戦旗』1巻5号、1928年9月、82頁。

46

植民地朝鮮における朝鮮人向けの初等教育機関である普通学校の朝鮮人教員が、朝鮮人普通学校教員の日本語発音が「出鱈目に近い」ことを指摘し、「特にひどいのは濁りであるが、道が「ミチ」であつたり、明けるが「アゲル」になつたりする」点や、「チユクエ(机)」、「コジヤイマス」、「ジャブドン」と、ザがジャになる例をあげている(朴永仁「国語教育と普通学校教員の発音問題」『文教の朝鮮』65号、1931年1月、147頁)。教壇に立つ者でもそうなのか、と思わせるが、すぐさま「普通教育六年師範教育六年を経て、机を「チユクエ」といつたり、座布団を「ヂャブトン」といつたりしたのは、国家に対して申訳がないではありませんか」といった反論がなされている(李鍾極「国語教育と普通学校の発音問題の筆者に」『文教の朝鮮』69号、1931年5月、106頁)。

47

壺井繁治「十五円五十銭」『戦旗』1巻5号、1928年9月、82頁。ちなみに、掲載翌年の1929年の再度の共産党弾圧事件(4.16事件)で壺井は29日間勾留され、その後二度の獄中生活を送ることになる。

48

壺井繁治「震災の思ひ出」『民主朝鮮』2巻7号、1947年1月、65頁。

49

壺井繁治『激流の魚——壺井繁治自伝』立風書房、1975年、171頁（初版は光和堂、1966年）。

発音で試すことが、戒厳司令部から駅を警戒する戒厳屯所まで指令されていたらしい」⁴⁹と、組織的であることを断定的に記している。

長野県のとある駅での兵士の訊問に震災発生からわずか5日で「15円50銭」が登場していたことに、なんらかの背景を読みとろうとすることはあながちまちがいではない。東京で誰何されたときとのちがいが、こうした推測を固めるものになったかと思われるのだが、明確な資料はない。そこに「支配階級の死に物狂ひの姿」をみいだしてもよいのだが、支配階級ではない民衆のなかからこうした識別法がおそらく生みだされ、民衆でもある自警団などによって「活用」されていた点こそが、今日のヘイト・スピーチと結びつけて考える際に重要である。

3-3 後世への影響

「15円50銭」に関しては壺井のこの文章が同時代的にはほぼ唯一のものと思われる。ここで、これが前節でみた後世の証言に影響をあたえた可能性について考えねばならない。

掲載誌の『戦旗』は、創刊の年は6,300部から8,200部を印刷し、最大で22,000部発行するなど健闘していたが、社会的な影響力を強くもっていたとするには躊躇する（全26冊中13冊が発禁。ただし、壺井の「十五円五十銭」が掲載された1巻5号は7,000部刊行で発禁になっていない）⁵⁰。

また、先にふれたように、この『戦旗』とほぼ同内容のものを敗戦後『民主朝鮮』に「震災の思ひ出」（1947年1月）として掲載しているが、在日朝鮮人が刊行主体の媒体である。さらにまた、1947年9月1日に「労農運動救援会および在日本朝鮮人連盟の共同主催で持たれた関東大震災犠牲者追悼会」⁵¹の席上で代読された詩「十五円五十銭」は『新日本文学』（1948年4月）に掲載されたものである（壺井は新日本文学会の創設発起人のひとり）。壺井発の「15円50銭」は左派系雑誌にのみ掲載されていたことがわかる。

断言はできないが、前節の証言者たちが壺井の文章を読んで影響を受けた可能性はそう高くないだろう。ただ、以下のような影響はあったようである。

資料①には、『虐殺』という1924年2月下旬に北京で印刷された冊子の日本語訳が掲載されている。朝鮮人に虐殺の模様を伝えるために印刷されたものと思われるが、英訳して在北京各国公使に配布するための資金あつめをしている、という情報を朝鮮総督府警務局が入手し、資料として日本語に翻訳、「虐殺と題する不穏冊子に関する件」（高警951号、1924年3月22日）として関係機関に発送した。それが資料①に掲載された『虐殺』である。著者は金建（あるいは金健）。朝鮮の江原道鉄原出身で1922年4月に関西学院に留学、震災前の1923年2月初旬に東京を出て朝鮮を経て北京に到着していた。震災後、「在上海独立新聞社長金承学が在名古屋の雑誌社員韓世復を震災被災地に特派」、金建もふくめ

50

壺井繁治「『戦旗』時代」『民主評論』1948年4月、5月（『戦旗 別巻（資料編）』戦旗復刻刊行会、1977年、53-54頁）。

51

壺井繁治「十五円五十銭」『新日本文学』2巻4号、1948年4月、56頁。

留学生ら十数人に朝鮮人犠牲者の調査を依頼したのだが、その際の副産物として金が著したのがこの『虐殺』であるという⁵²。ただ、この冊子のなかで、識別法については「町々街々汽車中までも通行人に倭国文の濁音字の発音をなさしめ以て韓人を扱出し」た、と簡単に記されるのみであった⁵³。ここでは「15円50銭」は登場しないが、この資料のこの部分にもとづいて書いた文章ではこうなっている。

かれらは朝鮮人を確認するために各処に検問所を設置し、会うひとごとに「15円50銭」または「ありがとうございます」を日本語で発音させてみて、濁音にすこしでも異常があれば無条件で朝鮮人と決めて殺害した。⁵⁴

これは朝鮮民主主義人民共和国の社会科学院が発行する雑誌『歴史科学』（1965年1号）に掲載された論文だが、同年すぐに『朝鮮研究』43号（1965年9月）に訳載されている。原文を確認したところ、正確な翻訳であった。とすれば、この論文の著者（歴史学学士とある）が、上記「濁音字の発音」の具体例として「15円50銭」と「ありがとうございます」をつけたした、ということになる。おそらくは、壺井の記述から「15円50銭」を加えたものと思われる。こうした例が示すように文献の形で浸透していき、既述のように、『在日コリアン辞典』で立項されるような朝鮮人虐殺を象徴するようなことばになっていくのである。ちなみに、項目執筆をした姜徳相は、1975年の著作では「かの有名な十五円五十五銭」と記している⁵⁵。

52

姜徳相「虐殺 再考、戒厳令なかりせば」、関東大震災85周年シンポジウム実行委員会編『震災・戒厳令・虐殺』三一書房、2008年、56頁。

53

姜徳相・琴兼洞編『現代史資料(6) 関東大震災と朝鮮人』みすず書房、1963年、338頁、331頁。ちなみに、『虐殺』では「同胞二万多数」が殺害されたとするものの、当時新聞などで報道された朝鮮人被害者の数の累計を4,405人と記している（同前、338頁）。なお、金も一員であった調査団が確認した朝鮮人被害者数は6,661人だという（姜徳相「虐殺 再考、戒厳令なかりせば」、関東大震災85周年シンポジウム実行委員会編『震災・戒厳令・虐殺』三一書房、2008年、57頁）。

54

崔泰鎮（音訳）、桑力谷森男訳「1923年関東大震災当時の在日朝鮮同胞にたいする日本帝国主義の野蛮的虐殺蛮行」、『朝鮮研究』43号、1965年9月、21頁。

55

姜徳相『関東大震災』中公新書、1975年、112頁。新版、青丘文化社、2003年でも同様である。

4 おわりに——あらたな流言に対処するために

以上、証言記憶のなかの「15円50銭」と活字記録のなかの「15円50銭」をみてきた。朝鮮人識別法としておそらくは震災以前から存在していたものが、洗練されて流言というメディアとともに拡散したと考えられる。この識別法は、朝鮮語の特徴をとらえたものであるが、つかう側からすればなぜ識別が可能なのかを考える必要もない、便利かつ巧妙な手段となっていく。語頭に濁音がこないという単なる現象⁵⁶が「発音できない」という否定的言辞と化すのは、区別・識別して「かれら」を析出する必要性が潜在的に存在していたからだろう。そしてこの識別法は朝鮮人虐殺の記憶へとつながっていく。

虐殺の記憶はそう簡単には消えない。とりわけ平時でないときに、強烈によみがえる。たとえば1945年の原爆投下直後。ある証言をきいてみよう。

朝鮮の慶尚南道陝川で生まれ、広島にいた敵粉連は被爆するのだが、リヤカーに乗せられて救護所に向かうときに、父に「絶対に韓国語を使うたらいけんよ」といわれた。それは「前の関東大震災で韓国人が火をつけたといわれたように、爆弾も韓国人がやったということで足で蹴ってから、赤チンキを塗ってもらっていたのが、犬に附ける薬はあるけれどお前たち朝鮮人につける薬はない、と蹴ら

56

日本語史がおしえてくれるところによれば、古代日本語にも語頭に濁音はこない。この現象は日本語系統論において重視されている。

57

丸屋博・石川逸子編『引き裂かれながら私たちは書いた——在韓被爆者の手記』西田書店、2006年、25頁。

58

横浜市立中学校で副読本として配布されている『わかるヨコハマ』の2012年版で朝鮮人虐殺への官憲の関与の記述を削除、「虐殺」も「殺害」といいかえ、さらに自警団による犯行も削除し、問題となった。2013年、関東大震災90年を機に、横浜開港資料館・横浜都市発展記念館・横浜歴史資料室が展示をおこなったが、そのときの資料集『関東大震災と横浜——廃墟から復興まで』（横浜都市発展記念館・横浜開港資料館編、2013年）の記述にも、「根拠のないデマが流れ、デマを信じた人びとによって、多くの朝鮮人や中国人が殺傷された」、「市内では約130もの自警団が作られ、地域の警備や救援物資の配給などにあたった」とある（24頁）。横浜市の公的な記憶がこのように書き換えられたのである。横浜市にきざった話ではないように思うが、こうした流れに抗する、たとえば関東大震災90周年記念行事実行委員会編『関東大震災 記憶の継承——歴史・地域・運動から現在を問う』（日本経済評論社、2014年）のような研究成果に耳を傾けていくことが不可欠であろう。ジェニファー・ワイゼンフェルド（篠儀直子訳）『関東大震災の想像力——災害と復興の視覚文化論』（青土社、2014年）のような手法も興味ぶかいのではあるが。

59

ほかにもたとえば、2014年8月20日に発生した広島土砂災害で被災した民家に空巣被害があると「在日朝鮮人の犯行だ」ときめつける流言がインターネット上でとびかったという（『こちら特報部』『東京新聞』2014年9月2日付朝刊、24、25頁）。

れたというんです」と述べている⁵⁷。原爆投下直後の混乱のなかで関東大震災の記憶（というよりも流言）が、広島日本人そして朝鮮人によりがえったのである。

では識別法に関していえばどうだろうか。公式な記録には残されていないが、壺井のような文学者や市井の人びとの証言、そして姜のような研究者によって積極的に記述されてきている。その意味ではメディアを通じて比較的認知されているといえなくもない。しかしながら、たとえば「15円50銭」でインターネット検索をしてみればわかるが、朝鮮人虐殺はなかった、などという白々しい言説もこのことばに関連して語られている。

加藤康男『関東大震災「朝鮮人虐殺」はなかった!』（WAC、2014年）という書籍での論法は以下のとおりである。東京や神奈川にいた朝鮮人人口から、軍や警察が「保護」した人数を引き、震災死した人数を推定してさらに引く。その結果、内務省も認める過剰防衛による死者233人というのが妥当なところではないか、というのである。この233名についても、「流言蜚語」は真実だという理由で自警団の正当防衛とされる。「流言蜚語」はなぜ真実なのか、といえば、朝鮮人テロ集団によるものだからなのだそう。内務大臣後藤進平もそれを知りつつ社会不安の拡大を恐れて情報をおさえていたのだという。

よって殺害はあったが「虐殺はなかった」⁵⁸。数多くの目撃証言もなんのその、である。ここには「テロとの戦い」だからなにをやってもよいという認識しかない。

当惑するしかないのであるが、これはあたらしい「流言蜚語」にほかならないし、「在特会」の朝鮮人認識とも共通している。人数の特定はほぼ不可能であるし、いかにも操作可能であることは、加藤康男自身が著書で示しているとおりである。それでも、このあたらしい流言は昨今の状況からみて、「真実」だとして流通させる回路をすでにもっているといわざるをえない⁵⁹。

残念ながら、この紀要よりも、こちらの書籍の方が読者が多いかもしれない。その上、同じメディアで議論をたたかわせることは、不可能に近いだろう。冒頭に紹介した加藤直樹『九月、東京の路上で』は、加藤康男にかかれば「韓国報道機関と変わらぬ反日トンデモ本」になるのだから。

くりかえすが、「15円50銭」は、朝鮮人との接触のなかで生まれてきた識別法であり、避難民・流言とともに拡大し、朝鮮人虐殺の記憶とともに記憶されてきた。壺井繁治が詩などの形で残したことで、後世の記述の際に参照され、ひとつの知識として定着しているといってもよいだろう。

最後に指摘しておきたいのは、こうした識別法がいまも必要とされていると思われることへの危惧である。「かれら」を析出して「われわれ」と区別しておくことの必要性。それは当然ではないかとされるかもしれないが、それでは、一個人として相手を見ることを放棄し、他者への想像力を奪い、「われわれ」のなかだけの高揚感にひたるいじけた人間を縮小再生産することにしかならないのである。